



日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター
第1四半期活動報告(4月~6月) 2004年 第1号

6月~イギリスにおける日本語と日本文化の普及

ロンドン研究連絡センター長 金口恭久



現在、私が住んでいるアパートのすぐ傍を、ロンドン交通局の13番というバス路線が走っている。ロンドンのバスは、2階建ての赤く塗られたバスで、日本でも有名である。ただ、旧型の車掌が乗車するボンネットタイプのバスは、徐々に新型に置き換えられ、少なくなってきたのは非常に残念である。

しかし、この13番のバスは未だに車掌が乗務する旧タイプのバスである。その13番にケビンさんという車掌が乗務している。ケビンさんは、日本語を話す車掌として、その沿線に住む日本人には、知る人ぞ知る存在である。

私は、日本語を話す車掌がいることを妻から聞いてはいたが、初めてケビンさんが乗務するバスに乗り、日本語で話しかけられた時には、正直言ってびっくりした。何度か乗り合わせるうちに、私の方からも積極的に話かけるようになった。何でも、元々日本に関心があったようだが、結婚を約束している相手が日本人であることから、その関係で日本語を本格的に勉強するようになったようだ。

しかし、語学学校に通っているわけでもなく、常務の傍ら独習しているのだそうだが、日本語の学習を初めてまだ1年4ヶ月というのに、相当の会話力である。ケビンさんの乗務するバスに乗り合わせるのは、せいぜい二月に一度くらいであるが、会うたびに、日本語が上達していることに驚きを禁じ得ない。

ロンドンに住んでいると、片言であっても日本語で話しかけられることが多いことにびっくりする。オフィスの近くのデリのマスター、地下鉄の駅の定期券発売窓口の駅員、もちろん、「こんにちは」や「ありがとう」のレベルではあるが、以前住んでいたアメリカのニューヨーク地域では考えられなかったことである。

また、ロンドンの地下鉄の駅では、券売機で日本語の表示を選択することが可能である。日本人が多いロンドンでは、このようなサービスは特別驚くべくことではないのかもしれないが、イギリスの田舎やスコットランドを旅行していると、こんなところでもというような場所で、日本語のパンフレットが用意されている。ネス湖のエキシビジョンセンターでも仏語や独語と並んで日本語の上映プログラムがあったし、特別有名でもない城にも、日本語で書いた解説が用意されていたりする。もちろん、日本からの観光客を当て込むといった営業上の戦略もあるだろうが、しかし、これも、アメリカではついぞお目にかからなかったことである。

イギリスでは、昨年、代表的な日本語学科を有するダーラム大学が東アジア学部を募集停止にするなど、大学界を見渡す限り、日本学科の存在はじり貧の状況にある。しかし、その一方で、従来型の歌舞伎や古寺などの伝統的な日本文化ではなく、アニメやゲームソフトなど新しい文化や合気道・空手などのスポーツから日本への関心に目覚める若者が増えてきていることも事実である。現地校に通っている私の中学生の娘の友人もそうである。

できるだけ多くの人に、日本語や日本への関心をもってもらうことは、日本の対外戦略上から望ましいことであるが、関心を持ってもらう対象は、多岐にわたっているということ、今回のイギリスの滞在で改めて感じている。

■センターの主な活動

- 4月 1日 Mrs Ling Thompson, Ms Jane Lydden and Miss Caroline Chipperfield 氏と欧米短期及び10周年記念式典に関する打ち合わせ。(金口, 大川)
Professor Colin Bundy (SOAS 学長), Professor Elisabeth Croll (SOAS 副学長), Professor Andrew Gerstle and Mr Andrew Keeble らと村上教授(早稲田大学)及びJSPSでSOASを訪問。SOASにおける財務関係, 日英交流プログラムの活用状況について会談。(金口, 大川)
研修生・田中, 疋津及び平野氏らがロンドンへ到着。
- 5日 グラスゴー大学戸田氏と打ち合わせ。(金口, 大川, シモーネ, 田中)
- 6日 University of Kent における英国・日本研究協会・政治学会会合に参加。(金口)
- 8日 Daiwa seminar へ参加。英国同窓会幹部である Dr Hugo Dobson が元外務事務次官の野上氏をホストとして講演。(大川)
- 12日 センター長会議に出席。(金口)
- 19日 センター事務官会議に出席。(大川)
- 22日 朝日新聞社の記者・辻氏がセンター来訪。JSPS ロンドンセンターの活動・辻氏のオックスフォード大学での活動等について情報提供するとともに, 英国の高等教育に関するテーマについて意見交換を行った。(金口, 大川)
- 23日 Nottingham Trent University を訪問。(金口)
UCL 建築学科レセプション出席、バリー・シェアマン文教委員長と会談。(金口, 大川)
- 28日 EPSRC 年次総会に出席。(金口)
Daiwa seminar へ参加。(金口)
- 29日 樋口審議官(初等中等教育局担当), 森初等中等教育局企画官及び村上初等中等教育企画課補佐センター来訪。JSPS の情報提供及び懇談を行った。(金口, 大川)
- 30日 University of Cardiff の seminar に参加。(金口, 大川)
- 5月 4日 University of Durham 東アジア学部訪問、Dr. Cross 他と英国における日本研究の動向等について意見交換。(金口)
- 6日 Professor David Hughes (SOAS 音楽学部長) と会談。日本古典音楽に関する活動について情報収集するとともに, 欧米短期を中心に JSPS のプログラムを紹介。(大川)
- 14-15日 ボンセンターセミナーに同窓会副会長 Dr. Kingsbury とともに出席。(金口)
- 17日 柳田学術システム研究センター副所長及び山田調査官がセンター来訪。JSPS の近年の活動状況等報告を行った。(金口, 大川)
第3回同窓会役員会開催。
- 18日 Centre for Japanese & East Asian Studies 所長 Dr Ruth Taplin と会談。JSPS のプログラム等について説明。(金口, 大川)
- 19日 The Royal Society staff と欧米短期及び10周年記念式典に関する打ち合わせ(金口, 大川, シモーネ, 疋津)

British Academy, Mrs Lydonn と欧米短期について打ち合わせ（金口，大川，シモーネ，
疋津）

大使館折田大使主催表彰式に出席（金口）

21日 大使館・横山氏と会談。JSPS のプログラム・センターの活動について説明。（大川）

28日 The Royal Society staff と10周年につき打ち合わせ。（大川，シモーネ，疋津）

疊（もたい）在英大使館参事官がセンター来訪。JSPS のプログラム・当センターの活
動について説明。（金口，大川）

6月 2日 遠山前文部科学大臣及び清浦人物交流課長英国へ到着。

英国大使公邸にて HEFCE 会長 Sir Howard Newby, 英国教育労働省 Dr Nicholas Sanders
らを交えて日英の高等教育に関する意見交換。（金口，大川）

3日 チャーチルカレッジ学長 Sir John Boyd 及びケンブリッジ大学工学部長 Professor Keith
Glover と日英の高等教育に関する会談。

4日 英国同窓会総会開催

ロンドン研究連絡センター10周年記念式典開催

8日 国会視察（the Higher Education Bill）（大川）

14日 The Royal Society staff と打ち合わせ（欧米短期）

折田英国大使と会談（金口，大川）

16日 在英日本大使館・日英若者交流プログラム
説明会に参加。（大川，田中，疋津，平野）

British Academy 主催 11th Zuckerman Lecture に出席。（金口，大川）

19日 串田 JICA 調査役と会談。（大川）

21日 浅野・木村一等秘書官と会談。（金口，大川，シモーネ）

24日 University of London Career Service 主催 Science and Engineering Recruitment Fair
に出席（大川）

東京大学総長補佐中西教授と会談（金口，大川，平野）

25日 Mrs Ling Thompson, The Royal Society と The Royal Society の組織改編等について
打ち合わせ。（金口，大川，シモーネ）

30日 マンチェスターにて日英若者交流プログラム説明会に参加。（大川，疋津，平野）



ロンドンセンター新メンバー

■ ロンドン研究連絡センター10周年記念式典を開催



The Royal Society

and Physical Sciences Research Council) 会長 Professor Dame Julia Higgins 氏からご挨拶いただきました。

遠山前文部科学大臣からは「知の世紀に向けた日本の高等教育改革」と題し、本年4月に大きく変革した国立大学法人を中心とした日本の高等教育政策についてご講演いただき、多くの出席者から感銘を受けた旨のお言葉を賜りました。

遠山前文部科学大臣のご講演が終了し、ドリンク・レセプションにて参加者に和んでいただいた後、夕食会を開催いたしました。当夕食会におきましては、小野理事長及び自然環境研究会議 (Natural Environment Research Council) 会長 Professor John Lawton 氏からのご挨拶の後、折田英国大使より乾杯のお言葉を頂戴いたしました。夕食会で行われました日本の古典音楽は、予想以上に英国側出席者からも好評を頂く等、出席者全体で本式典を楽しむことが出来ました。



本センターは、1994年に設立され、本年10周年を迎えることになりました。これを祝し、The Royal Societyにおきまして、遠山前文部科学大臣を講師としてお迎えして、また小野日本学術振興会理事長及び折田英国大使のご出席を賜り、ロンドン研究連絡センター10周年記念式典を開催いたしました。

本記念式典は小野理事長のご挨拶を皮切りに、続いて英国側より工学物理学研究会議 (Engineering



小野理事長



Professor Dame Julia Higgins



遠山前文部科学大臣

本記念式典は、晴天にも恵まれ、英国政府関係者及び著名な研究者等総勢110名を越える出席者の中、成功裡に閉会することができました。ロンドン研究連絡センター一同、大使館や英国政府関係機関を始めご協力いただいた方々に感謝の意を表する次第であります。

また本記念式典では、今までお世話になった方々との交流を図ることのみならず、以前より当センターとは直接関係のなかった方で日本に関心をお持ちの方々にもお声がけをし、ご出席いただくことにより、JSPSをより広く知ってもらい、また日本への関心を強めてもらう良い機会になったことが大きな成果であると考えております。

本記念式典を一つの足がかりとして、今後の日英の関係構築及び拡大を図ってまいりたいと考えております。(大川)



小野理事長



Professor John Lawton



折田英国大使

JSPS London Office 10th Anniversary Celebrations

JSPS London Office 10th Anniversary Celebrations

10th Anniversary Celebration: 17:00 - 18:30

1. Introductory Speech by Professor Motoyuki Ono, President of JSPS
2. Speech by Professor Dame Julia Higgins, Foreign Secretary and Vice-President of The Royal Society.
3. Speech by Professor Yasuhisa Kanaguchi, Director of JSPS London Office
4. Lecture by Professor Atsuko Toyama, Former Japanese Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT)
5. Welcome Reception

Dinner: 18:30 - 21:00

6. Speech by Professor Motoyuki Ono, President of JSPS
7. Speech by Professor John Lawton, Chief Executive, NERC
8. Toast by Mr. Masaki Orita, Ambassador of Japan
9. A Performance of Japanese Music



■UK-JSPS ALUMNI ASSOCIATION 第1回総会を開催

ロンドン研究連絡センター10周年記念式典に先立ち、2004年6月4日(金)14:00、The Royal Society 講堂にて第1回同窓会総会が開催されました。本総会は昨年11月の同窓会設立準備会合により開催が決定されたもので、外国人特別研究員同窓生等を中心に英国在住の海外特別研究員からも積極的な参加がありました。

冒頭、金口センター長より同窓会設立に係る経緯についての説明があり、大多数の会員の支持により会長以下4名



第1回総会出席者一同



の同窓会役員が選出された旨の報告がありました。

選出された役員は次の

とおりです。会長：Prof. Peter Sammonds (University College London)、副会長：Dr. Martyn Kingsbury (Imperial College School of Medicine)、会計担当：Dr. Hugo Dobson (University of Sheffield)、秘書担当：Dr. Darren Bagnall (University of Southampton)。

Professor Peter Sammonds 会長

その後、新会長の Prof. Peter Sammonds 氏に司会が引き継がれ、同窓会役員及び全参加者からの挨拶、Dr Arnulf Jäger-Waldau ドイツ同窓会会長による同窓会活動の紹介、清浦人物交流課長による挨拶、同窓生から Dr Peter Matanle (University of Sheffield)、Dr Andrew Faulkner (University of Oxford)の両名による日本滞在中の経験談等の発表がありました。

後半は、本会の対応機関である The Royal Society、The British Academy 及び各リサーチカウンシルよりプログラムの紹介や最近の動向についてのプレゼンテーションがあり、参加者全員が熱心に聞き入っていました。

総会終了後、アフタヌーンティーが用意されリラックスした雰囲気の中、お互いの親睦を深めることができました。次回会合は2004年11月18日(木)にオックスフォードにて開催される予定です。(平野)



Programme for Annual General Assembly

1. Welcome and General Information by the Director of JSPS London Office
2. Executive Board Members' Introductory Speech
3. All Participants' Introduction
4. Speech by Dr. Arnulf Jäger-Waldau, a German Alumni Association Executive Member
5. Speech by Mr. Kiyoura, Head, Foreign Fellowship Division JSPS
6. Speech by Dr. Peter Matanle, University of Sheffield
7. Speech from JSPS fellow, Mr. Andrew Faulkner, Oxford University

(Short break)

8. Presentations by representatives from The Royal Society, The British Academy and UK Research Councils
9. Question & Answer Session
10. Announcements & Closing Speech
11. Refreshments of Afternoon Tea

■在英日本大使館における日英若者交流プログラム説明会に参加

6月16日(水)、在英国日本大使館において Japan Information and Culture Centre による Embassy Information Day が開催されました。昨年からはまったこのイベントは、英国の大学の就職課職員を対象に文部科学省国費留学生制度や J E T プログラムを紹介し、併せて J S P S 事業や交流プログラム、奨学団体、日本の国立大学法人についての説明を行うものです。日本での勉学や研究、国際交流を英国人学生のキャリア選択の一つとして位置づけることを目的としています。

当日は大川事務官が J S P S の事業について、また、3人の研修生それぞれが各自の所属大学について説明を行いました。英国各地から30名ほどの大学職員が参加し、大使館や J S P S の事業、各大学の説明を熱心に聞いていました。

第二回は6月30日(水)にマンチェスターで、第三回は7月13日(火)にグラスゴーで行われ、ロンドンセンターからも事業説明を行う予定です。(田中)



J S P S の事業説明をする大川事務官

参 加 機 関

City University	University of East Anglia
Exeter University	University of Hull
Foundation for International Education	University of Kent at Canterbury
Imperial College London	University of Oxford
King's College London	University of Reading
Liverpool Hope University	University of Sussex
Loughborough University	University of Wales, Swansea
Oxford Brookes University	University of Warwick
Queen Mary's College London	University of Westminster
University of Birmingham	York St John University College

■外国人特別研究員(欧米・短期)審査結果について

当センターでは2004年度分の外国人特別研究員(欧米・短期)の募集を昨年度末から行い、5月14日(金)に募集を締め切った結果、合計33件の応募がありました。前回の申請件数18件から大幅に増加し、当センターとしては本プログラムの周知・広報について一定の成果があったと考えております。当センターで資格要件等について審査し、申請のあった33件のうち資格要件を満たした29件を、The British Academy(社会科学・人文科学分野の申請7件)及びThe Royal Society(自然科学分野の申請22件)

へそれぞれ審査を依頼しました。両機関の審査の結果The British Academyから4件、The Royal Societyから8件が選抜され、当センターとしてこれらの12件を本部へ推薦したところです。

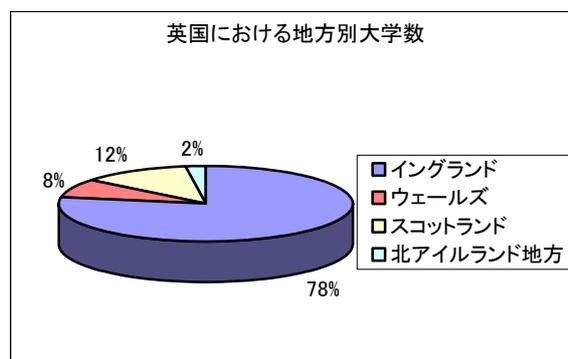
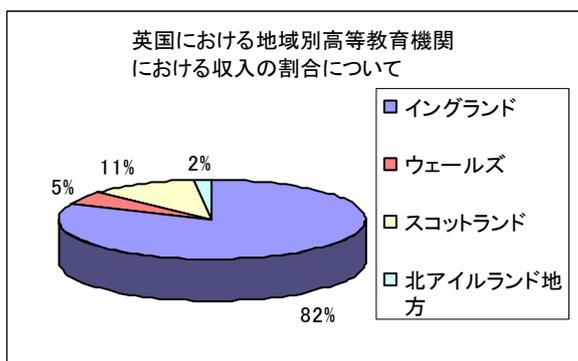
外国人特別研究員(欧米・短期)は、昨年度創設され、今回が2回目の募集となったわけですが、募集のあり方や、審査の方法について、様々な問題点が浮かび上がってきています。毎回募集を重ねる毎にそういった問題点をつぶしつつ、このプログラムが日英の学術交流に資するよう、当センターでも議論を重ねていく方針です。(正津)



H P による事業の周知

■ 英国トピックス① ～英国の高等教育財政事情について

英国では5日働いた内の2日分は税金として政府等に徴収されており、今後の税収等について国家の運営に様々な議論が寄せられている。教育・研究の分野に関しても例外ではなく、昨年1月より審議されている高等教育法案(Higher Education Bill)においても、大学進学率を上げるといった目的以外に、政府等からの資金援助がほぼ限界に達し、大幅な拡大は不可能だという現実を見据え、大学独自で収入を得る手法を構築するといった目的もあるのではと世の中ではいろいろな物議を醸しているところである。そこで今回、高等教育財政の現状を以下にあるデータを元に分析してみたい。



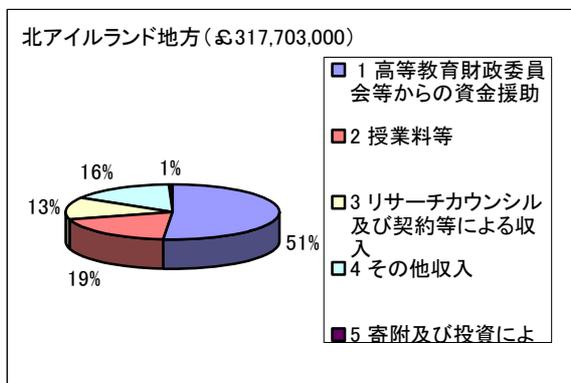
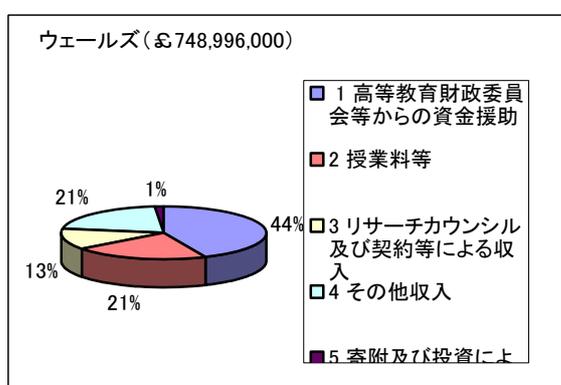
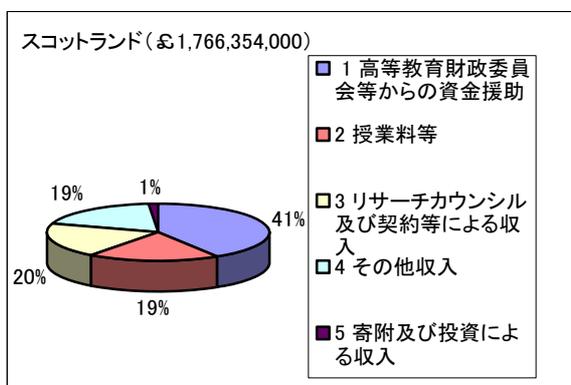
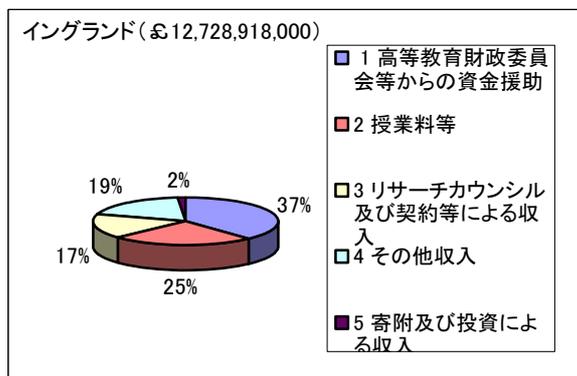
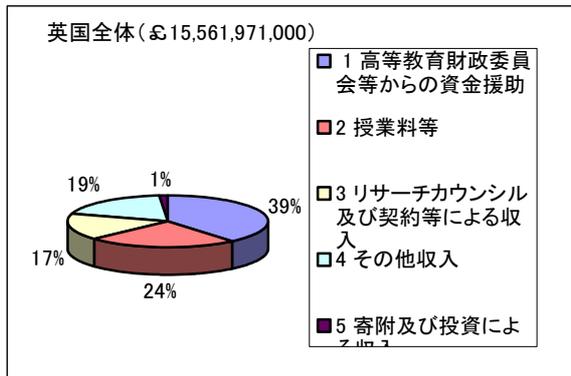
(Statistic等 2002/2003)

英国の教育は、基本的にイングランド、ウェールズ、スコットランド及び北アイルランド地方の各地域で独自に行われており、高等教育の分野においても同様である。また、高等教育関係機関における財源については多岐に渡る。政府、政府関係機関、地方公共団体、チャリティー団体、病院及び企業等がそれぞれ高等教育機関に対し財政支援を行い、大学等が運営されている。英国の地域別にその収入を見てみるとほぼ高等教育機関の数と同じ割合であることが分かる。ちなみに高等教育機関数は以下のとおりである。

英国における地方別大学等数

英国全体	170
イングランド	132
ウェールズ	14
スコットランド	20
北アイルランド地方	4

一方、英国の高等教育機関の状況を財源別に見てみると、英国全体からいうと、以下の円グラフからも分かるように高等教育財政委員会(HEFCs)からの財政支援が約40%で最も多く、次いで授業料等による収入、その他収入、リサーチカウンシル等からの財政支援及び寄附等という順になっている。



(Statistic等 2002/2003)

高等教育財政委員会からの財政支援は大きく分けて、教育に対する資金援助 (約60%)、研究に対する資金援助 (約20%)、その他 (大学内危機管理体制構築に対する財政支援等約20%) に分かれる一方で、リサーチカウンシルや各省庁、チャリティー等からの収入は研究に対する資金援助が中心となる。その他収入には、大学病院等での収益や知的財産による収入、教育課程の認定料、教員の派遣による収入、ケータリング等による収入、産業界からの投資、EUその他諸外国からの投資等が含まれ、全体の20%を占める。この割合は日本の大学における割合に比し、かなり大きなものであり、本年4月より法人化し、国からより自立した日本の大学における運営にも大きく参考になるものであろう。

英国の地域別財政状況を見ると北アイルランド地方でリサーチカウンシル等からの財政支援の占める割合が小さく、高等教育財政委員会からの財政支援が大きいことを除くと、各地域ほぼ同じような割合になっていることが分かる。今後、高等教育法案(Higher Education Bill)が成立し、施行されると授業料等の収入の占める割合が大きくなることが容易に予想される。

先日、英国のとある教授と話をしたところ、リサーチカウンシルの審査は非常に厳しく、新規に研究費を獲得するのは容易でないため、別のところで積極的にアピールし、援助を受けないと研究の継続は難しいとのことだった。また、研究分野によってそもそもの予算額に差があり（例えば医学と工学）、研究の継続の難易度はそれによっても異なる。工学部（Department of Engineering）の場合、設備投資に多額の資金が必要な一方で、対象分野が広く、研究者の数も多く競争率が高い。その教授は常になんらかの支援先を探しているとのことであった。

また、現下の政策に着目すると、今年の3月に Higher Education Funding Council for England は 5*（研究評価の中で最高位）を 1996 年及び 2001 年と 2 回連続で獲得した研究については援助を拡大する決定を行った。こうした状況を考えると研究分野ごと及び学部間の差が益々拡大していくことであろう。

このように高等教育機関における運営については、一概に大学単位・機関単位では述べられない。特に英国の「古い大学」は大学内の各機関が独立しており、学部ごと、研究所ごとで運営されている。したがって今回示したような事項とは別の観点からの検討も必要となる。これについての考察は次の機会にしたい。（大川）

<備考>

○高等教育財政委員会は英国内の北アイルランドを除き、各地域におかれ、財政支援を行っている。

Higher Education Funding Council for England (HEFCE)

Higher Education Funding Council for Wales (HEFCW)

Scotland Higher Education Funding Council (SHEFC)

※北アイルランドは Department for Employment and Learning Northern Ireland にて交付している。

○£ 1 = 約 200 円

英国トピックス② ～英国で高まる留学生に対する期待

2004年4月、ブリティッシュ・カウンシルから‘Vision 2020: Forecasting International Student Mobility’及び‘The Global Value of Education and Training Exports to the UK Economy’と題する2つの報告書が発表されました。

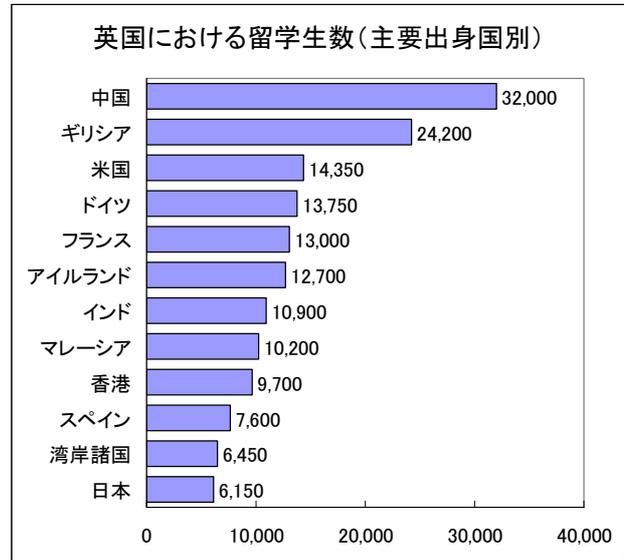
報告書によると、英国の留学生数は2020年までに現在の3倍の87万人となり、その経済的効果は年間130億ポンドに達すると見込まれています。英国は、アメリカ合衆国に次いで世界第二位の留学生受入国で、現在27万人の留学生が在籍しており、2020年までには全世界の留学生市場は580万人に達するとされています。

英国での需要拡大が見込まれる留学生の主な供給源は中国で2020年には同国からの留学生は22万5千人になると予測しています。また、拡大EUの発足によりトルコ、ルーマニア、ポーランドからの留学生が急増すると予測されています。

英国では、自国の学生及びEUからの留学生とそれ以外の学生との授業料には大きな格差があり、自国の学生の授業料が年間1,100ポンドに対して、留学生が大学に対して支払う額は年間1人平均16,000ポンドといわれています。そのため一部の大学では、収入を増加させるために積極的に留学生を受け入れています。オックスフォード大学においても、既に、自国学生の定員を据え置き、より高い授業料収入が見込まれる留学生の受け入れを増加させる検討をしています。

留学生数の増加により自国の学生が英国の大学から閉め出されることが懸念されていますが、同カウンシルのスポークスマンは英国の学生が競争に負けることはないだろうと述べています。しかしながらリバプール大学のAlan Smithers教授によると、英国の大学は、今後、収入の増加を見込むことができない自国の学生と高い授業料を支払う留学生のどちらを選択するか厳しい決断を迫られることになるだろうと述べ、さらには、英国の学生がトップクラスの大学に入学することは今後ますます難しくなるだろうと警告しています。

報告書は、英国の大学がアメリカ合衆国、ドイツ、フランス、インド、マレーシア等の国々との競争に勝つためには、留学生を引きつけるための更なる投資が必要だと結論づけています。(平野)



参考：THE INDEPENDENT, 21 April 2004

THE GUARDIAN, 21 April 2004

監修：金口 恭久（ロンドン研究連絡センター長）

編集長：大川 晃平（ロンドン研究連絡センター事務官）編集担当：平野 裕次（研修生）

執筆：金口 恭久、大川 晃平、平野 裕次、田中 美保、疋津 美佳